



展覧会企画公募 EXHIBITIONS 2012年1月16日(月) ▶ 2月18日(土)

若手の展覧会企画者を対象としたCCC(静岡市クリエイター支援センター)の支援プログラムである「New Creators Competition 2012 展覧会企画公募」において、多数のご応募をいただきました。今回は応募作品の全てのクオリティが非常に高く、審査の過程で特例として、3企画の選出となりました。厳正なる選考の結果選出された3組の企画者による展示を同時開催いたします。

「雨」企画者:高野友実

「ウラヤマの鳥」企画者:高橋啓祐

「はかりしらん」企画者:谷川寛

タイトル: NCC 2012 展覧会企画公募 EXHIBITIONS 主催: 静岡市クリエイター支援センター
会期: 2012年1月16日(月) - 2月18日(土) (日・祝日休み) 審査員: しりあがり寿(漫画家)、五十嵐太郎(建築評論家・建築史家)
開場時間: 10:00-20:30 久米英之(CCCプロデューサー)、大森久美(CCCキュレーター)
会場: 静岡市クリエイター支援センター 入場料: 無料

■本展についてのお問い合わせ

静岡市クリエイター支援センター CCC 〒420-0853 静岡市葵区追手町4番16号 tel:054-205-4750 e-mail: info@c-c-c.or.jp website: www.c-c-c.or.jp 広報担当: 西尾、吉野



the center
for creative
communications

静岡市クリエイター支援センター CCC(The Center for Creative Communications)
〒420-0853 静岡市葵区追手町4番16号 tel:054-205-4750 e-mail: info@c-c-c.or.jp website: http://www.c-c-c.or.jp/

「雨」 企画者:高野友実(京都)

■コンセプト

この展示は、2009年から2011年に撮影された雨の画像で構成されている。雨は雲から落ちて、地面を湿らせる、世界を循環する水の一形態である。これは誰もが知っていることだが、実際に雨粒を見ることが出来るのは、それが私たちの目を通り過ぎる一瞬だけである。この画像は、雨粒が落ちて消える瞬間を停止し、拡大する。それは一粒の雨の終わりのしるしであり、同時にそのエネルギーが別の何かに変わる瞬間でもある。雨が降っているとき、わたしたちは何か別の流れに巻き込まれている。わたしは、ここで止まっている。「始め」と「終わり」の信号が、どこかで延々と堆積し続ける。次に信号が鳴ったとき、わたしはそれを捉えることができるだろうか。(高野友実)

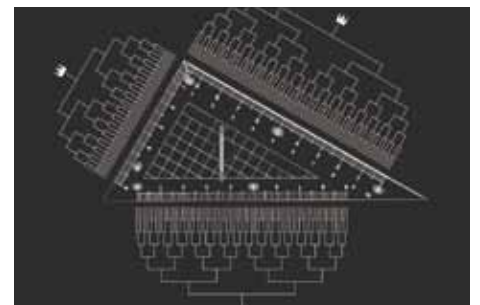
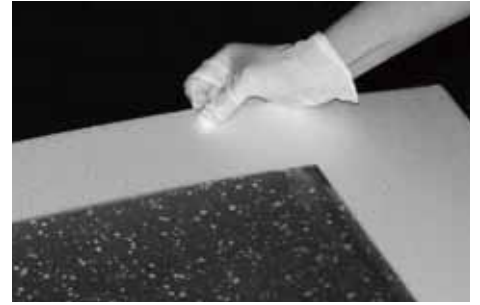
■プロフィール:高野友実(たかの ともみ)

1984年/福井市生まれ 2010年/京都芸繊維大学工芸学部造形工学科卒業 2010年/京都芸繊維大学大学院工芸科学研究科 在籍中 2010年/「影を拾う」(boogaloo cafe 四条店/京都)
協力:松村康平 (<http://www.matsumurakohei.com/>)

■審査員講評

□皆に馴染み深い「雨」を銀板写真を使い独自の視点から切り取り発展させた作品は、全く新しい美しさ、新しい自然の姿をボクたちの前に現してくれるでしょう。(しりあがり寿/漫画家)

□高野氏の作品は、今回の応募作品においてもっとも美しく、また独自の世界観をもっていた。雨が直接的に銀塩フィルムにあたり、液体がうごき、はじけるその痕跡が写真として記録される。イメージの光を写しとったものではなく、写真自体がイベントの証となった唯一の作品。雨という自然現象を水平面によって切り取るわけだが、展示でも壁掛けではなく、作品を水平に置くことによって、鑑賞時における垂直方向の視線を貫く。暗い空間においてスライドの映写機が見知らぬ雨のイメージを白い板に投影し、歩きまわると、超指向性のスピーカーによって音波の壁をくぐりぬげる。これは体験したい展示空間だった。(五十嵐太郎/建築評論家・建築史家)



「ウラヤマの鳥」 企画者:高橋啓祐(神奈川)

■コンセプト

いま、私たちは多くのものを失いました。失うことによって、明日が必ずしも明日ではないということを知りました。永遠にやってもこない夜と、永遠に明けることのない夜を私たちは同時に体験しています。いま私たちに必要なのは、生きるということと、死ぬということが、そうした状況のなかでくり返されているのだということの本当の意味でよく理解することでしょう。そのために私は、たとえばいま、足下にある小さな石ころについて考えます。たとえばいま、頭上を横切る一羽の黒い鳥について考えます。たとえばいま、家のウラヤマに咲いている小さな花について考えます。(高橋啓祐)

■プロフィール:高橋啓祐(たかはし けいすけ)

パフォーマンスカンパニー・ニブロールの映像ディレクターとして、活動する一方、個人でも映像作家として、主に映像と身体インスタレーション作品を発表し、イタリアでの個展をはじめ、国内外のアートフェスティバルにも参加している。05年第9回文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦優秀作品受賞。

■審査員講評

□現実の巣箱と影としての鳥の戯れの中から浮かび上がるボクたちの街。経験豊かな作者が織り成す映像インスタレーションが必ずボクたちを幻惑、魅了してくれることを楽しみにしています。(しりあがり寿/漫画家)

□off-nibrollの高橋氏は、すでに多くの活動を国内外で展開しているアーティストであり、これまでの実績も申し分ない。二次選考におけるプレゼンテーションも機器のトラブルにもかかわらず、堂々としていた。今回、さまざまな隠喩を伴う、鳥の映像を使う作品を提案しているが、おそらく十分に高いウオリティで仕上がるだろうという安心感がある。高橋氏の参加はCCC展覧会企画公募のレベルを引き上げるはずだ。あえて言えば、実績がありすぎるのが、新鋭の発掘という側面を弱めるかもしれないが、本人にとっても、学校建築をリノベーションした空間において、新機軸を打ち出す作品になることを期待したい。(五十嵐太郎/建築評論家・建築史家)

「はかりしらん」 企画者:谷川寛(愛知)

■コンセプト

私たちは自らを取り囲む茫漠たるこの世界をなんとか捉えようと、そこに目盛りを与えてきた。「測ること」は、世界に対して共通認識を持つための私たちのツールであり、世界を把握しようとする人間の知的好奇心や欲望の表れでもある。今回、測り方や尺度を教わった小学校の教室という空間で、身体感覚にまで染み付いた「測ること」について考えたい。基準が与える安心感と、そこから溢れるもの。グラデーション。必然と偶然。決して測ることができない予知や予兆、また人間の感覚といったもの。測ることを通してみえてくる「はかりしらん」ことこそが、世界の豊かで複雑な諸相を知るための手掛りになるのではないかと思う。測りきれないという無力感を超えて。(谷川寛)

■プロフィール:谷川寛(たにがわ ひろし)

2000/Bゼミ修了 2001/横浜国立大学卒業 2003/東京芸術大学大学院美術研究科修了 2000/JCDデザイン賞入選 2002/アートベンチング優秀賞受賞 2003/サロンド・プランタン賞受賞 2008/アーツチャレンジ出品作家に選出 2008/MIO写真奨励賞 審査員特別賞受賞 2010/あいちトリエンナーレコンペにて出品作家に選出 2011/上野彦馬賞入選 <http://tllstudio.blog40.fc2.com>

■審査員講評

□子供の自由研究のような素朴で無邪気な好奇心が、元小学校のここCCCでアートとして花開く可能性を感じました。はかることをテーマにした様々な切り口の作品がどういった空間をつくりだすのか期待されます。(しりあがり寿/漫画家)

□谷川氏は、アートの活動を積極的に行う建築家である。今回の企画では、世界を測ることをテーマとしつつ、そこからはみ出るものを同時に問いかけていく作品が提案された。モビール、分度器、三角定規など、学校で見慣れたツールをもとに少し手を加えていく、さまざまなアイデアがにぎやかに示されている。なかでも川の流路の分岐点を撮影するシリーズは、それだけでも単体としての展示がホワイトキューブにおいて十分に可能だろう。とはいえ、CCCの場所の特性を考えると、黒板とともにできるだけ多くの作品を並べ、むしろちょっと変わった理科教室のように演出した空間の方が似合うように思われた。(五十嵐太郎/建築評論家・建築史家)